

手作業の感覚から学ぶ

岐阜県立森林文化アカデミー 講師 ● 新津 裕

初めまして、4月から森林環境教育専攻の教員として赴任しました新津裕です。神奈川県の漁村で生まれ海辺で育ちましたが、いつの間にか森林に魅せられ森林と関わる仕事に従事してきました。

●時代と逆行？

森林文化アカデミーの実習では、時間は少ないですが動力を使わない手道具での森林整備作業を行う実習があります。



初めて扱う斧に悪戦苦闘。使い方さえ慣れてくれば、ノコギリとの併用なら1本10分程度で伐倒できてしまいます。



全ては使わないが、あると便利な伐倒補助具と運搬用のトビやトチカンなど。山の道具は古くても、手入れさえしっかりしていれば問題なく使えます。

オノやノコギリ、クサビなどを持って

演習林の中で伐採と加工を行います。チェーンソー等の動力機械に比べれば作業効率は劣りますが、人力だけでも十分に木を伐り倒し、加工することが出来るのです。しかも、動力機械は燃料が無くなれば作業がストップしてしまいますが、手道具の良いところは、軽く、持ち運びが容易、かつ刃の切れ味さえ保てれば体力の続く限り作業を継続することが出来ます。

●木と対話する

人力で木を伐り倒し加工する中で、木と対話することが出来ます。「なんでまっすぐ割れないのだろう?」「木口のヒビから割ると綺麗に割れるよ!」「あっ節がある!」手に伝わる感覚や音の変化。参加した学生の姿を見ていると、ほんの些細な事にも気づき出し、自発的にそこから観察を行い、次の作業で工夫を加えていく姿が見られました。

自然体験活動の中では、聞いたことは「忘れる」、みつけたことは「できる」ようになる「自らの発見が学びには効果的である」と言われますが、時間をかけて手で作業をするからこそ多くの学びの要素があることに気が付きます。



クサビは木を倒す時だけでなく、使い次第で丸太を半割にすることも出来ます。

森の中にある自然物は一つとして同じものはありません。同じ種だとしても枝の付け方、根の張り方などすべてが異なります。植林された木は同じ場所でも育っても皆それぞれが個性を持っています。その個性をしっかりと読み解き、どう接していくのか。人との関わり方となら変わりがありませんね。

林業体験は森を整備する為に行うというイメージが強いかもしれませんが、「手は第2の脳」とも言われています。大脳の領域の約三分の一が指と手をコントロールするために使われています。逆に手や指先を動かす事で、脳を刺激し活性化するとされています。森が綺麗になるだけでなく、体験する側にとっても「身体を使い脳を活性化させる効果がある」と考えたら手作業で行う森の整備も何だかワクワクしませんか。



生えている木は1本1本すべて形や状況が違います。最初にそれを読み解くのが一番大切な事。